

同時接種Q&A
2017年08月10日現在

湘南鎌倉バースクリニック
〒247-0066 鎌倉市山崎1090-5
TEL: 0467-45-4103
FAX: 0467-45-1721
ウェブサイト: <http://www.sk-bc.jp/>
電子メール: birth@shonankamakura.or.jp

目次

[Q1: 同時接種って何?](#)

[Q2: 同時接種の危険性](#)

[Q3: ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種が一時的に中止となった理由](#)

[Q4: ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の死亡原因](#)

[Q5: 外国でのヒブ・肺炎球菌両ワクチン](#)

[Q6: 外国での同時接種](#)

[Q7: 同時接種のメリット](#)

[Q8: 同時接種への不安](#)

[Q9: 最新情報入手方法](#)

Q1: 同時接種って何?

同時接種とは、どういう接種方法なのですか?

A1: 複数のワクチンを1度に続けて接種することです。

同時接種とは、複数のワクチンを1度にまとめて次から次へと続けて接種する方法のことです。複数のワクチンを複数箇所と同時に接種するわけでもありませんし、複数のワクチンを混合して1か所に接種するわけでもありません。同時接種するワクチンの数や種類に制限はありません。

[目次に戻る](#)

Q2: 同時接種の危険性

同時接種は危険ではないのですか?

A2: 同時接種は危険ではありません。

同時接種は決して危険なものではありません。少なくとも、同時接種が単独接種よりも危険ということはありません。同時接種が危険であるとする学会発表や学術論文はありません。何本同時接種しても、個々の単独接種より効果が減ることはありません。また、何本同時接種しても、個々の単独接種の合計より副反応の症状が重くなったり副反応の出現頻度が高くなったりすることはありません。

人体は、ワクチン接種を受けない自然の状態でも、きわめて多数・多量の病原体にすでに暴露されています。ワクチン接種は、ごく少数・少量の病原体(類似物質)に追加で暴露される状態に過ぎません。

ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の事例がありましたが、日本小児科学会は、これらの事例が報告される前の2011年1月にすでに、「ワクチンの同時接種は、日本の子どもたちをワクチンで予防できる病気から守るために必要な医療行為である」と提言しています。

[目次に戻る](#)

Q3: ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種が一時的に中止となった理由

ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種が一時的にせよ中止となったのは、なぜですか?

A3: 厚労省がワクチン接種の専門家に相談もせずに独断で行った通達のためです。

ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の事例が相次いだことを受けて、厚労省は、2011年03月04日から、同時接種だけではなく単独接種を含めて、ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種を中止するよう全国の自治体・医療機関に通達しました。これは、厚労省が、ワクチン接種の専門家に相談することもなく、独自に判断したものです。接種中止のさなか、ワクチン接種の専門家を交えた会議が開かれました。両ワクチン接種後の死亡頻度は、両ワクチン接種が普及している外国では10万接種あたり0.1~1人と報告されており、さきの事例を受けた日本では10万接種あたり0.1~0.2人でした。結局、さきの事例の死亡原因は、ヒブ・肺炎球菌のどちらかのワクチン接種でも同時接種でもないとの結論に達して、厚労省は、中止から4週も経過した2011年04月01日になってようやく、ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種を中止前と全く同じ状態で再開するよう全国の自治体・

医療機関に通達しました。これで、ヒブ・肺炎球菌両ワクチンの単独接種はもちろんのこと、同時接種もこれまで通り可能となったのです。

[目次に戻る](#)

Q4: ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の死亡原因

ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の死亡原因は、ワクチン接種でないとしたら、いったい何なのですか？

A4: 死亡原因は、乳幼児突然死症候群をはじめ、いろいろ考えられます。

ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の死亡原因は、いろいろ考えられます。例えば、乳幼児突然死症候群という病気では、日本国内で年間150人以上の乳幼児が死亡しています。つまり、この病気だけでも日本国内で週に3人以上、健康な乳幼児が突然死しているのです。当然のことながら、ワクチン接種のすぐ後に偶然この病気を発症することがありえます。ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種後に亡くなった乳幼児の死亡原因が乳幼児突然死症候群だったかどうかは不明とされていますが、この病気の頻度から考えれば、十分にありうることです。

[目次に戻る](#)

Q5: 外国でのヒブ・肺炎球菌両ワクチン

外国ではヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種は安全とされているのですか？

A5: 外国でもヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種は安全とされています。

ヒブワクチン接種は1990年から20年以上の間に世界の2億人以上に、肺炎球菌ワクチン接種は2000年から10年以上の間に世界の数千万人以上に、実施されてきました。ヒブ・肺炎球菌両ワクチンの同時接種も10年以上の間、世界中で実施されてきました。両ワクチンとも、単独接種でも同時接種でも、安全なワクチンとされています。

米国では肺炎球菌ワクチン導入後2年間で実施された3150万接種中、接種後死亡は117人でしたが、ワクチン接種とは無関係な偶然の死亡とされています。肺炎球菌ワクチン接種はその後も普通に継続されています。

[目次に戻る](#)

Q6: 外国での同時接種

外国では同時接種は行われているのですか？

A6: 外国では同時接種は普通に実施されています。

米国での同時接種は、1970年代から実施されはじめ、1985年には推奨勧告が出され、さらに2002年には「個人が受けるべき全てのワクチンが同時接種されることは極めて重要である」との勧告が出されました。WHOからも1995年に「現在、予防接種拡大計画で使用されている全てのワクチンは同時接種しても安全かつ有効である」という、同時接種を積極的に推奨する勧告が出されています。

外国での乳児期早期のワクチン接種スケジュールをみると、米国ではヒブ、肺炎球菌、三種混合、不活化ポリオ、B型肝炎、口夕の計8種類の同時接種が、台湾では米国の8種類に無夾膜型インフルエンザ桿菌を加えた計9種類の同時接種が、実施されています。

このように、先進国でも途上国でも世界中で多種類の同時接種がごく普通に実施されています。

[目次に戻る](#)

Q7: 同時接種のメリット

同時接種のメリットは何ですか？

A7: 医療機関を訪れる手間が減るうえに、多くの感染症に対する免疫が早くつきます。

成人一人の外出と違って、乳幼児を連れての外出は、その準備からして大変です。ワクチン接種の目的で2歳までに医療機関を訪れる回数は、すべて単独接種にすると公費17回、私費13回、計30回必要ですが、同時接種にすると10回で済みます(Q: 実際のワクチン接種スケジュールにある表で回数を実際に数えてみてください)(インフルエンザワクチンを除く)。このように、同時接種であれば、医療機関を訪れるのに必要な外出の回数が減るので、外出のための負担が減るだけでなく、外出によって受ける感染の機会も減ります。

化膿性髄膜炎をはじめとする重篤な感染症を起こす主要な細菌は、ヒブと肺炎球菌です。どこにでもいる、ありふれた細菌です。この化膿性髄膜炎は、乳幼児が罹患する最も恐ろしい感染症のひとつで、発症者の約5～10%が死亡し、約15～30%が発達の遅れ、てんかん、難聴などの後遺症をのこします。日本国内での年間の化膿性髄膜炎の発症者数は、ヒブによるもの約500～600人、肺炎球菌によるもの約200人です。発症年齢は約50%が1歳未満で、約80%が2歳未満です。頻度としては決して高くはありませんが、乳幼児の誰が発症するかわからないし、乳幼児の誰が発症してもおかしくありません。

米国では1990年にヒブワクチン接種を開始したところ、ヒブ感染症が99%減少しました。また、2000年に肺炎球菌ワクチン接種を開始したところ、同ワクチンに含まれる肺炎球菌の7つの血清型による5歳未満の髄膜炎と菌血症が95%以上減少しました。ヒブ・肺炎球菌の両ワクチンは、すでに世界100か国以上で使用されています。

ヒブ・肺炎球菌による、化膿性髄膜炎をはじめとする重篤な感染症を発症しうる危険は乳児期早期からあります。したがって、ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種は、接種可能となったらすぐ、生後2か月になったらすぐ受ける必要があります。

単独接種であれば、同時接種よりも、免疫がつくのが1週間、2週間と遅れますから、それだけ化膿性髄膜炎をはじめとする重篤な感染症を発症する危険が高まります。ヒブによる化膿性髄膜炎よりも肺炎球菌による化膿性髄膜炎の方が低頻度ですが重篤です。つまり、ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種は、優先順位がほぼ同じです。したがって、ヒブ・肺炎球菌の両ワクチン接種は、同時接種で受ける必要があります。

以上から、ヒブ・肺炎球菌に対する免疫をつけるためには、ヒブ・肺炎球菌両ワクチンを生後2か月になったらすぐ同時接種で受ける必要があります。

同時接種のメリットはヒブ・肺炎球菌に限ったことではありません。同時接種であれば、多くの感染症に対する免疫が、少ない手間で早くつきます。

[目次に戻る](#)

Q8: 同時接種への不安

どうしても同時接種が不安なのですか？

A8: ワクチン接種で予防できる感染症を発症してしまってから、ワクチン接種を早く受けなかったことを悔やんでも遅いのです。

百歩譲って仮にさきの事例の死亡原因が同時接種だったとしても、同時接種を受けて死亡する危険より、ワクチン接種を早く受けなかったために化膿性髄膜炎を発症して死亡したり重い後遺症をのこしたりする危険の方が、はるかに高いのは間違いありません。「同時接種によるかどうかよくわからない死亡の、年間数人の不確実な極めて低い危険性」と「ワクチン接種を早く受けなかったことによる化膿性髄膜炎発症の、年間千人近くの確実な極めて高い危険性」のうち、どちらが重大かという比較の問題になりますが、これは明らかだと思います。

[目次に戻る](#)

Q9: 最新情報入手方法

同時接種に関する最新情報を入手するには、どうしたらよいですか？

A9: 当クリニック公式ウェブサイトをご訪問下さい。

本Q&Aは、日々はいつてくる情報を盛り込んで随時改訂しています。是非最新のQ&Aをお読み下さい。最新のQ&Aは、当クリニック公式ウェブサイトから、pdfファイルの形で入手できます。

[目次に戻る](#)